

令和5年度 国語国文学科  
学校推薦型選抜・特別選抜 小論文 出題の意図

問題文の出典：キム・ジヘ [金知慧]・尹怡景訳「プロローグ あなたには差別は見えませんか？」『差別はたいてい悪意のない人がする一見えない排除に気づくための10章』大月書店、2021年8月23日、pp.3-10（出題にあたって表記を一部改変した）。

指定時間内で出題文を受験生自身の経験等に重ねながら読み解き、それを論理的に表現できているかをねらいとして出題した。

問

- 1) 設問の趣旨を的確にとらえているか。
- 2) 課題の所在を把握し、適切に絞り込んでいるか。
- 3) 具体例と関連させて説得力をもって論じているか。
- 4) 文章を整然とまとめているか。

※ この「出題の意図」についての質問及び照会には、一切回答しません。

学校推薦型選抜・特別選抜 小論文 問題用紙

【問題】次の文章は、筆者が「差別はたいてい悪意のない人がする」ということに気付いたきっかけを述べた部分である。この点をふまえた上で、差別を解消していくためにこれからどうすべきだと考えるか。その際、(1)差別される側、(2)差別する側、それぞれについてあなた自身の経験 ないしは見聞したことを挙げ、八〇〇字以上一〇〇〇字以内で述べなさい。なお、記述されたあなた自身の経験そのものに関して、減点または加点することはありません。

※文章は著作権の問題により公開できません。

キム・ジへ 金知慧)・尹怡景訳 プログ あなたには差別は見えますか？」差別はたいてい悪意のない人がする―見えない排除に気づくための10章』 大月書店、二〇二二年八月二三日)より。出題にあたって表記を一部改変した)

令和5年度 国語国文学科  
学校推薦型選抜・特別選抜 小論文 出題の意図

問題文の出典：平野啓一郎『死刑について』（岩波書店）2022.6

79頁～84頁より 底本にはない注を付し表記を一部改変した

指定時間内において、一定量の出題文を筆者の論旨に即して読解し、それに対する受験者自身の考えを論理的に表現できることをねらいとして出題する。

問1

- 1) 設問の趣旨を的確に捉えているか
  - ・「キリスト教的(な)世界観」という表現を出題文後半の趣旨に照らして無理なく説明がなされているか
  - ・絶対神による最後の審判というキリスト教的観点と死刑不支持との関係性が明確に説明されているか
- 2) 解答の諸条件（指定語句・指定字数）を満たしているか
  - ・「キリスト教的(な)世界観」という語を活かして作文がなされているか
  - ・250～300字におさまっているか

問2

- 1) 具体例と関連させて説得力をもって論じているか
  - ・自死をもって、あるいは辞任をもって責任を取ることを問題点にしっかり据えて論述されているか
  - ・挙げられた具体的事例は論旨に合致しているか
- 2) 文章展開が適切であるか
  - ・論旨が明快か
  - ・文章の組立に不自然性はないか

※ この「出題の意図」についての質問及び照会には、一切回答しません。

## 令和五年度 山形県立米沢女子短期大学 国語国文学科

## 学校推薦型選抜・特別選抜 小論文 問題用紙

出題文を読み、次の【設問一】 【設問二】にそれぞれ解答しなさい。【設問一】については、二五〇字以上三〇〇字以内に、【設問二】については、五五〇字以上七〇〇字以内におさめなさい。

【設問一】 出題文の後半に、欧州諸国をはじめ法律上刑罰に死刑を科さないという事実について、日本の場合と対照的に述べられているが、これには絶対神の存在の有無が深く関与すると分析されている。キリスト教圏において死刑を科すことが支持されない理由について、出題文の趣旨に即してまとめなさい。なお、その際、文中の傍線部「キリスト教的(な)世界観」という表現を用い、かつまたこの表現の意味説明を含めて記述しなさい。

【設問二】 自死をもって罪を償うということに対して、その是非あるいはそれにまつわる、あなた自身の解釈について、見聞した事例を挙げながら論述しなさい。ただしこの問題に関して、「自死をもって」という部分を「辞任をもって」と読み替え、「責任を取って現在の任務を辞することの是非あるいはその解釈」にシフトチェンジして述べても差し支えないものとする。

日本では、死に謝罪や責任を取る意味を認める文化が根強くあります。このことも死刑の支持に影響を与えていると思われます。「死んでお詫びをする」といった言い方がありますが、かつて武士が行っていた切腹は、刑罰の一つでしたし、また、不始末の責任を取る方法でもありました。つまり、自殺することによって、罪を償うことが潔いものとして肯定される文化です。それと表裏をなすように、過ちを犯した人間は死をもって償うべきだという発想も、日本社会には存在し続けてきたのではないのでしょうか。こうした発想は日本文化に特有のものではないかと感じます。

例えば、ヨーロッパの小説作品にも自殺する人物は数多く登場します。古典的な作品でいえば、<sup>注一</sup>トーマス・マンの小説『魔の山』(一九二四年)ではナフタという登場人物が自殺しますし、<sup>注二</sup>ゲーテの『若きウェルテルの悩み』(一七七四年)や<sup>注三</sup>トルストイの『アンナ・カレーニナ』(一八七五～七七年)、<sup>注四</sup>フローベルの『ボヴァリー夫人』(一八五七年)などが思い浮かびます。しかし、日本のように社会に対する謝罪や責任を取るという意味で自殺するケースは、なかなか思い浮かびません。多くの場合は、人生の破綻であって、追い詰められて、苦しみの果てに自殺するといふものです。

日本でももちろん、そのような自殺の方がむしろ一般的かもしれませんが、小説でもドラマでも、謝罪の意味で、あるいは自ら責任を取るという意味で、自分の命を差し出す場面が少なからずあります。森鷗外は、そのような切腹を何度もテーマにしていますし、夏目漱石の『こころ』(一九一四年)もやはり、「罪悪感」が大きな動機になっています。この価値観においては、死なずに生き続けていることは無責任であり、罪を自覚していない、社会に対して本気で謝罪していないことと受け止められます。「のうと生きてる」などと言われますが、生き続けている、存在し続けていることそれ自体が非難されるのであって、つまりは存在の抹殺です。だからこそ、死刑廃止派の議論の中でも、あえて「死ぬのではなく、生きて償ってほしい」という廃止の理由が語られることがあります。死ねば責任を果たせるわけではない、という考え方です。

今述べた日本の文化的な要因とも関係しますが、死刑が支持される背景として宗教的な問題についても触れておきます。日本で死刑廃止運動にかかわっている方の中にはクリスチャンが少なからずいます。先に述べましたが、ヨーロッパの文学作品では、加害者の側に焦点を当てた作品が多く見受けられます。旧約聖書に描かれている、人類最初の殺人を犯したとされる<sup>注五</sup>カインとその被害者のアベルの物語に始まり、歴史的にずっと受け継がれてきました。これは、カインとアベルの物語がそうであるように、人類はすべて神の被造物であり、人間の営みはすべて神に見られており、世界の終末時において、最後の審判によって人類の罪が裁かれるというキリスト教的な世界観が反映されていると考えられます。

つまり、最終的には神によって裁かれることを前提にしており、審判を下せるのは神のみであるという考えです。その考えのもとでは、人間社会では最終的な審判を下すことはできず、それが人間同士の「ゆるし」の根拠となっています。「愛」という概念に関して、<sup>注六</sup>エロスやフィリアといったギリシア哲学の「愛」が、基本的には愛するに値する人を愛する、というものであったのに対して、<sup>注六</sup>キリスト教のアガペーは、隣人愛のみならず、敵をも愛しなさい、と

いうほとんど倒錯的な愛を説き、結果、愛されるに値しないと目されて、愛の概念からこぼれ落ちてしまう人たちにまでその対象を拡張し、衝撃的な影響をヨーロッパ社会にもたらしました。<sup>注七</sup>ドストエフスキの『カラマゾフの兄弟』（一八八〇年）では、無神論者であるイワンが、死後の世界が存在せず、この人間の世界すべてが完結しているのなら、何をやっても許されるのではないかと述べますが、これは今述べたようなキリスト教的な世界観があることを前提としたうえで、それに対する疑いを無神論者の声に反映させたものです。

現代の日本の場合、まず宗教的な規範意識が弱く、キリスト教圏やイスラム教圏の社会と比べると、神の存在はもちろん、死後の世界に対する観念もとても曖昧です。非常に世俗的で、思い思いに想像されたものとして、天国や地獄のイメージがあるぐらいです。絶対的な神の存在がなく、最終的に人を裁くのは神であるという形而上学的な価値観もない社会では、人間社会で起きたことは、すべて人間社会の中で解決しなければならないという考え方につながっていきません。そうした中で、深刻な罪を犯したような加害者が生き残っているのは許せない、死刑にすべきだというのは、いわば、この社会に自分たちの手で地獄をつくらなければならない、という発想です。

ここまで述べたような日本における文化や宗教に関する特徴は、日常的にあまり意識されず、半ば無意識に私たちの社会に共有されており、そのことが、死刑があることを、ある意味、当然と考えるような意識を形づくってしまっています。もともと、「文化」として語りましたが、実際にどの程度の歴史性があるかについては個別に議論すべきでしょう。決定論的に捉えるのではなく、変えることができるかと考えるべきだと思います。

（平野啓一郎『死刑について』岩波書店・二〇二二年刊行、表記・表現を部分的に改変して出題した）

注一 トーマス・マン（一八七五～一九五五、ドイツの小説家）の『魔の山』

青年ハンス・カストルプが、第一次世界大戦時にアルプス山脈のダボスにあるサナトリウムで過ごした七年間、種々多様な人々との交流を通じて成長する姿が描かれた長編小説。登場人物のうち、ナフタは虚無主義者として描かれる。

注二 ゲーテ（一七四九～一八三二、ドイツの詩人・劇作家）の『若きウェルテルの悩み』

婚約者のいる女性シャルロッテに対して、青年ウェルテルが懸想し、苦悩の末自殺するまでを描いた長編小説。

注三 トルストイ（一八二八～一九一〇、ロシアの小説家）の『アンナ・カレーニナ』

政府高官カレーニンの妻であるアンナが、将校ヴォロンスキーと互いに惹かれあうも、不品行により社交界からともに締め出され、最後には投身自殺に追いやられるという筋書きの長編小説。

注四 フローベル（一八二一～一八八〇、フランスの小説家）の『ボヴァリー夫人』

平凡な田舎の生活に倦んだ主人公エマ・ボヴァリーが、自由で華やかな世界に憧れ、不品行に起因する借金地獄に追い詰められたあげく、人生に絶望して服毒自殺する。エマの生涯とその死後シャルルがエマを追慕しつつその跡を追って絶命するまでを描いた長編小説。

注五 カインとその被害者のアベルの物語

旧約聖書の創世記に登場し、アダムとイヴの子どもであり、人類初の兄弟とされる兄カインと弟アベルの話。カインは農業、アベルは畜産業にそれぞれ従事し、神への供御として成果物を奉納するも、カインは拒否されアベルは受理される。この理不尽さに憤ったカインは逆恨みからアベルを殺めてしまうという、人類初の殺人が描かれた物語。

注六 エロスやフィリア キリスト教のアガペー

古代ギリシアの愛の概念が基底にある言葉。エロスは自分に内在する満たされない欲求を他に対して求める衝動力を言い、一般的には男女間の「恋愛」と理解される。フィリアは友人間での信頼や連帯感を言い、「友愛」と理解される。アガペーはエロスと逆方向の対概念で、ひたすら自分から他に対して与える愛、すなわち「無償の愛」「父たる神の、子たる人間に対する自己犠牲的愛」と理解される。

注七 ドストエフスキ（一八二一～一八八一、ロシアの小説家）の『カラマゾフの兄弟』

淫蕩癖があり物欲にまみれたフォードルを父に持つ、長男ドミトリー、次男イワン、三男アリョーシャの三兄弟と、下男としてカラマゾフ家に仕えるスメルジャコフ（実は息子三人と異母兄弟の関係にある人物）を中心に、フォードルの謎の死をめぐる推理物仕立てで展開する長編小説。知識人で無神論者のイワンは、神がなければ総てが許されるという独自の哲学を持った人物として作中に描かれる。